

それぞれの最終楽章

助け合いの町で 1

永源寺地域は、滋賀県東近江市の山間部。高齢化率も高く、20年余りの日本の姿を先取りする「先進地域」だと考えています。

昔ながらの地域のコミュニティが色濃く残り、誰もが顔見知りで、ご近所の助け合いは当たり前。だから、一人暮らしでがんになっても最期まで自宅で過ごせます。

勉さんは、診療所の駐車場に雪が積もると、診療待ちの間、頼まれていないのに雪かきをしてくれるようなお人柄。年上の奥さんを自宅で看取った後は1人で暮らし、弟さんが

【永源寺地区】

- 2005年に合併する前の旧永源寺町。広さ181平方キロで、東京都世田谷区の3倍。5300人が住む
- 診療所一つと開業医1人
- 高齢化率35%。40年の全国平均（推計）を先取りしている
- 花戸さんは月に約70人を訪問診療。毎年約60人が死亡。在宅死の割合は約50%で全国平均は13%

にぎやかな末期がん患者の家



永源寺診療所長 花戸貴司さん

1970年滋賀県生まれ。自治医科大卒。大病院勤務などを経て、2000年から現職。著書に『最期も笑顔で』など。16年、へき地の若手医師を顕彰する第3回やぶ医者大賞受賞。

近くに住んでいました。

78歳で胃がんの手術を受け2年たった夏、肝臓への転移が見つかりました。手術はできない状態で、余命は1年以内とみられ、抗がん剤を服用することになりました。

私は日頃から、全ての患者さんに「ご飯が食べられなくなったらどうしますか」と延命治療の希望の有無を、「人生の最終章はどこで迎えますか」と在宅か病院かを聞いています。永源寺地域では9割近くの人か「家にいたい」と答えます。勉さんもそうでした。

退院後、10日ほどして訪問しました。昼食と夕食は配食サービスを受け、薬は薬局から届き、掃除や洗濯はヘルパーさん。お風呂は自力で入れます。ご近所さんがママに顔を出し、車でスーパーに連れていってく

れます。「おかげで好物の刺し身も食べられる。家はいいねえ」。介護サービスではこうはいきません。入院時より鎮痛剤の量は減りました。自宅にいる安心感からでしょう。

冬を迎え、だんだん食べられなくなってきました。最期が近づき、訪問診療の頻度も上がりますが、いつ訪れても、「何かできることはないか」とご近所さんがやってきます。

ゴミ出しをする人、交代でむくんだ足をさする人。「おばあちゃんを介護して慣れている」と、横になっている勉さんの歯磨きをしてくれる人。「なんもすることない。いるだけや」というおじいさんも。ご本人は談笑を聞きながら笑顔を見せる。とにかくにぎやかなのです。末期がん患者の部屋とは思えません。

3月末、縁者やご近所さんに見守られ、「最期まで家にいたい」という望みをかなえ、穏やかに旅立ちました。

（構成・畑川剛毅）Ⅱ全6回

朝日新聞デジタルの医療サイト「アピタル」で、より詳しくご覧になれます。